

「1年生の『理科授業』(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

1年生の子どもでも、「化石」という語は知っているし、博物館や図鑑で見たことがある子も多い。中には「アンモナイト持ってる!」という子もいた。しかし、それはほとんどが外国産(イングランド、ドイツ、マダガスカルなど)が多い。フィールドで採取した母岩付きの国産アンモナイトはなかなか見る機会はないだろう。

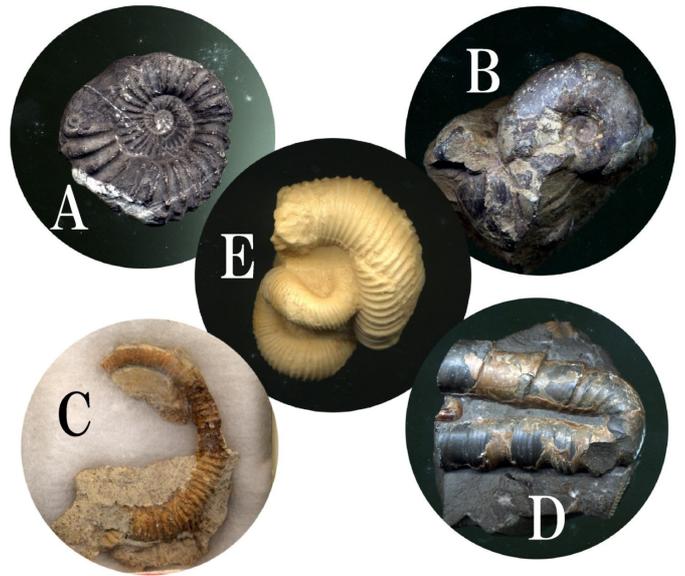


私は自分が北海道で採取したアンモナイトの化石を、一人一人に見せて回った。子どもたちは、触ってみたいという衝動はあるようだが、「貴重なものだから、触っちゃいけない」と感じているようだった。「あとで休み時間に触ってもいいからね」というと、びっくりしていた。



机間でよく見えなかった子には、そばで見せてあげ

た。「カタツムリみたい」「グルグルに巻いてるねー。」など、反応もさまざまだった。私は次に、「異常巻きアンモナイト」について説明した。



A B ; 普通のアンモナイト / A ; ヒマラヤ産 B ; テトラゴニーテス・北海道幾春別産
C~E ; 異常巻きアンモナイト / C ; ハミテス・イギリス産 D ; ポリプテコセラス・北海道三笠産 E ; ニッポニテス・北海道小平(おびら)産(元化石から型取自作の模型)

異常巻きアンモナイトというのは、主として白亜紀後期のアンモナイト絶滅寸前に出現した、異常な巻き方のアンモナイトの総称だ。決して1個体だけの「奇形」ではなく、異常巻きアンモナイトは、それぞれ固有の種を形成している。



写真は、最も特異な形状をしている「ニッポニテス」の説明をしているところ。「こんなになって、グチャグチャに巻いてるんです!」と身を挺して説明した。